

カール・デイトツェル

「国民経済との関連よりみたる国債制度」(二)

池 田 浩 太 郎

第三章 信 用

ふるい時代の経済学の著作家連中は、信用にたいし、これが受けるに価いするほどの注目をはらうことをあまりしなかつた。国民経済、とくに生産についての唯物的・物質的見解が物的基礎のほほ全く欠けた「信用という」ものの経済力を評価するのをさまたげたわけである。それゆえアダム・スミスは信用を独立したものととして理解したり論じたりはしなかつた。スミスはただ一国の流通をより安い費用で調達すべき手段としてのみ信用を論じ、かつ考察したにすぎなかつたのである。¹⁾

S.21

1) スミス、国富論、独訳、第二編、第二章、三二ページ以下。「もし紙幣が金貨や銀貨にかわってきめられると、商業国民経済との関連よりみたる国債制度(一)」

ユフスキー (Cieszkowski) がこの点にひとつの重点をおいている。すなわち、彼はつきのようにいう。「信用とは、固定され動けなくなっている資本の、流通する、あるいは解放された資本への形態変化である」(Du crédit et de la circulation, Paris, 1839, 五ページ)と。かかる定義はロッシマーが体系、第一卷、一四五ページで正しく指摘したように、いづれにしても狭きに失するものである。

最近の国民経済学は信用の正しい理解に漸次近づきつつある。流通手段の増大とならんで信用の最も主要なる効用はそれが諸資本により高い作用をもたらすことになる点にあるということ国民経済学が認めてきたからである。¹⁾しかし資本の概念規定が不充分であるので残念ながらこの見解の展開はさまざまげられている。²⁾

1) これはガニールの書物に最も明瞭に記されている。Charles Ganiilh, Principes d'économie politique et de finance, Paris, 1835. 一一〇ページ。「信用は資本にたいし、より利潤をうみ、かつより適した用途を獲得させようとするものである。信用は可処分生産物にたいして、これを再生産して利潤をうむような用途を確保しようとする」と。この書物のうちには総じて信用の真の本質に関する非常にしっかりした見方がみとめられるのである。

2) Friedrich Nebenius, Der öffentliche Credit, 2. Aufl., Karlsruhe u. Baden 1829, §. 1. では信用を「何人か他の人にたいする支払の約束にあたつていなく、信頼、ならびに既存価値をかかる約束でもつて獲得する能力と名づけてゐる。^{註③}この点ではラウの見解もネーニウスと同一である (Karl Heinrich Rau, Lehrbuch der politischen Oekonomie, Erster Band, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 3. Aufl., Heidelberg 1837, §. 278——以下ではラウ、経済学と略記する——)。かかる概念の解明は決して妥当なものとはおもわれなう。これはあくらかに語句の解明であつて信用の経済的本質の解明であるとはいえないからである。信用の経済的本質はまさに他者が価値を獲得するという点に存する。それゆえ、すくなくとも「信頼」をあまり強調しすぎてはならない。信頼が最も重要であるというわけではないからである。ひきつづいての財貨の移転をとまなわぬ単純なる信頼はあくらかに経済的に国民経済との関連よりみたる国債制度 (註④)

国民経済との関連よりみたる国債制度 (二)

は全然問題にならないであろう。それゆえロッシア⁽¹⁾の与えた次の定義の方がより事物の核心を把握していることになる(ロッシア、体系、第一巻、一四五ページ)。すなわち「信用とは対価の約束のみで他人の財貨を処理しうる自由意志によつて供与される権能である」と。彼の場合もまた表現は若干あいまいではある。なおJ・S・ミル、原理、第二巻、三六ページおよびHenrik von Storch, Cours d'économie politique, St. Petersbourg, 1815. 第三巻、四五ページ参照。

注(1) これはネーベニウスの定義の要約である。ディーツェルの引用には原著の字句通りの引用でない場合もあるので注意すべきである。

一、信用の経済的意味

信用の概念規定を確立するために、信用の国民経済にたいしてもつ意義を把握することにまず努力しよう。

信用が国民経済にたいしてもつ意義、すなわち、信用が国民経済の諸目的達成を助成する様式にはつぎの三とおりのものがある。

(1) 信用は国民の経済的労働をしてそれぞれの時点に所与の状況下で可能なる最高度の生産性を達成させる。なぜならば信用は労働者全体にすべての既存資本の所有(を委ね)させるからである。すなわち、労働がなされるべき、またなしうる当の対象、および労働がなされるべき、またなしうる媒介としての対象を完全な方法で用意するからである。これによつて一方では国民の労働力がよりよく利用されることになる。なぜならば労働力のどの部分も労働対象が存在しなくて利用されずじまいになったりすることなく、また既存の労働材料を諸種の労働力間へ最も合目的に分配することが可能となるからである。他方こうして移転した資本はたまたま入手した人の手

にあるよりもよりおおきい利用価値を与えるであらう¹⁾。これは両関与者に同様に作用する経済利害から必然的に由来するものである。自分がそれを使用することによって資本利子の形で受取るよりもよりおおきな利益が期待でき、またそうしたいとおもうときには誰も資本というものを貸さないであらう。同様に資本利子の形で取られてしまふ以上の利益が期待できぬ場合には普通誰も資本を借りないのである。

1) ラウ、経済学、二八〇、二八一節、ロッシア、体系、一四六ページの場合も同様である。J・S・ミルは原理、第一巻、三七ページでもっと明瞭に述べている。「それゆえ一國の生産的資本は信用によって増加するのではなく、これら資本は信用によって生産活動のより完全な状態にさせられるにすぎないのである」と。さらにまたミルは三八ページでいう。「信用はかくて一國の全資本を生産的ならしめるのに不可欠なものである。それゆえこれは一國の産業家たちを生産目的に最もよく合うようにさせる手段なのである」と。ガニールは前掲書、一二二ページでつぎのようにいう。「私信用は可処分資本や生産物を使用しない所有者あるいは使用しようとはしない所有者から、それらを使用しうる、また使用を望む別の人へ譲渡することを意味する」と。同様にセエも前掲書、第一巻、二八五ページで次のようにいう。「信用とは、資本をもたない人にたいし、自分自身で資本を活用する意志がないか、あるいはそれのできない人の資本の自由処分権をあたえるものである」と。ヘルマン、前掲書、二二四ページも参照。

(2) 信用は資本の恒久かつ無限なる生成をもたらず。なぜならば信用はあらたに生まれ、または可処分となつた諸資本で所有者自身が生産的に使用しえなかつたり、あるいは生産的使用を欲しない人々にたいしても、この資本から利益を引きださうようにさせるからである。かくてこれらの人々は資本を入用の直接的充足のために消費しなくてもよくなる。信用はこれら諸資本を彼等からとりあげ、不断にあたらなる集積、すなわち不断にあたらなる資本形成へと向はせるからである。かくて彼等はつぎのような確信をもつにいたるであらう。すなわ

国民経済との関連よりみたる国債制度 (4)

ち、他の者が彼等にかわつてこのあたらしい資本を生産的に投下する、これによってあたらしい財貨が生産される、そして生産された財貨の価値の内から彼等は元本の償還をうけ、しかも余剰の一部を資本委譲のための報酬として受け取ることをはっきりと期待してもよい、ということに確信をもつにいたるのである。

1) 信用のもつこの作用は顕著で見のがすことができなにもかかわらず、たいがい正当には評価されていない。ラウ、経済学、二〇節、ロツシアー、体系、第一巻、一四七ページを参照せよ。後にわれわれはかかる低評価の原因を知ることになるであらう。すなわち、これは主として資本を正しく理解していないことから生ずる結果なのである。

(3) 信用は資本の集中、結合を共同的に効果あらしめる。資本の集中や結合は労働力の結合とならんで生産のより高度な発展のためには必然的に生じなければならぬものである。両者は勿論相互的に条件づけられている。この観点からすれば信用は単に既存生産設備の有利な拡充やより高度の形成を可能にするのみではなく、信用によつてのみはじめて生れるあたらしい生産設備をも出現させる。すなわち新生産設備には非常に巨大な資本が必要であり、個人々人では容易にこれの所有者たりえないからである。株式会社を想起すべきであらう。¹⁾

1) これは最近ロツシアーが体系、第一巻、一四六ページで強調したところである。

二、信用は生産力である

すべての国民経済は経済をおこなう個人たちの諸障害克服のための孤立した力の共同作業にもとづいている。その障害は理の当然として個人々が目的追求をする場合、彼等の弱い力の前にただかっているものである。労働力の結合は分業制度によつて生ずるが、資本の結合は信用によつてのみ可能である。両者は互につねに相応すべきものである。分業はつねに生産的企業の不断の拡大をもたらすので、これは同時により大なる資本の

一、個人への集中を必要とすることになる。

かくして国民経済のかなり高い段階では信用はこのようにしてもっとも利益のある、またもっとも生産的な企業に生産手段を調達するものとなる。しかも信用なくしては生産企業の存立が不可能であるというほどの量と完全性をもっている場合には、信用はひとつの本質的生産手段、不可欠の生産手段であり、ひとつの生産力と見なさねばならないであろう。

かかる信用の考察方法が国民経済理論で従来なら確乎たる承認をえられなかったことは、全国国民経済にたいする唯物的・素材的見方からする誤った資本理解にもとづいているのである。「信用は資本を創造するものではない。すなわち、信用は資本をただ移転させるのみである。借手がこれを有効に使う場合に貸手は資本を手放すのである。もし借手がなしたであらうよりも、より生産的に貸手が資本をつかうならばこれは国民経済にとつて利益というものであらう」¹⁾。

1) これについてはラウ、ロッシェー、ミルの前掲箇所をみよ。セネ、前掲書、第一巻、二八四ページをも参照〔ここはロッシェーの書物の引用のようである〕。

このような推論は一体正しいといえるのであろうか。この推論は、たとえば資本はその所有者になんらかのものを産みだす生産力である、というような見解を基礎にしている。

しかし、もし資本がそれ自体全然唯物的なものではないということ、またある事物はある一瞬間には資本でありえたが次の瞬間にはもはや資本ではなくなっていることが証明されるならば、そしてもし信用がかかるただよっている状態、いわば中立的状態にある財貨（これはしからずんば破壊にまかされてしまうであらう）を資本にする

S. 26

国民経済との関連よりみたる国債制度(二)

ための最も主要なる手段であるならば、信用はここでは生産力であり、信用は本来的にこのような資本をつくりだしたものであるといわねばならない。なぜならば信用の使用なしでは資本は存在しなかったらうし、しかも単に信用使用の結果資本は存在するからである。その対象が具相的に把握しうるもののみに対する行為を生産的といいたいために、たとえ人が「生産的」という表現に同意しないと、事物の本質を看過しないためにはかかる見方になれるべきである。ある原因の結果として財貨が存在し、その原因なくしては財貨が存在しえないような原因をわれわれはこの財貨の生産的原因とみるべきであらう。

かかる論争に結着をつけるためにわれわれは次章において資本概念をわれわれの見地より展開させてみよう。が、さしあたりは資本はただ生産的に使用された場合のみ本来の意味での資本であるという命題で満足しよう。国民の労働力が達成した完全性の程度を考慮しないとすれば、そのときどきに達成される国民経済の隆盛の程度はいまや主としてつねに生産に使用中の、すなわち人間労働力の作用下にある、「換言すれば」人間の経済活動の作用下にある、既存全資本につねに依存するのである。これはただ信用によってのみ可能である。

労働力と資本の両者は国民経済、とくにかかなり高度の国民経済段階においては原因となり結果となつて分ちがたく結びついている。経済的に高度に発展した国民を特徴づけ、その富の基本的要因をなす人間労働行為の高度の完全性は、諸国民がもっている信用なしでは到達できなかったであらう。

したがって諸国民がかかなり高度の文化段階にあるときには全生産、また総じて国民の全経済生活は信用の上に築き上げられ、また信用なくしては不可能であると考えらるべきであらう。

三 信用の概念規定

いまや信用の概念規定はおのづから生まれてくるであろう。「信用」とは国民経済における自由意志による資本の移転の原理をいう。自由意志による移転の原理というものがつねに非生産的使用または生産的使用の度合のひくいものより、より生産的な使用への移転であるということは誠に当然のことである。またこの場合これは自由意志の本質的要素から必然的に生まれてくるものでもある。なんとすれば、理性的に経済原則に則って行動する人間は、彼自身がこれをより生産的に投下することを欲しないか、またはできない場合にのみ資本を貸与するということを認めねばならないからである。欲すること、できること、これこそここで本質的に重要な事項なのである。おなじく借手も、もし彼がこの資本をもって貸手がなすであろうよりも、よりおおきな生産物価値を生産できると期待するときのみ資本を借り受けることになるであろう。

この場合勘定間違をし、その結果錯誤と資本喪失になることもありうるということは、信用が他のあらゆる人間の諸制度と分ちもつ影の半面である。それゆえ信用だけにとくべつにその罪をなすりつけてよいものでもなく、信用にたいしてのみつよくいってはいけないものである。かくして、たとえば後の成果で支出を償いうるならば生産的労働者の教育のための支出は生産的とみなされるであろう。かかる考えから一般に両親は子供に教育費をつぎこむのである。しかし子供がきめられた職業に適していなかったり、また一般に出来が悪かったり、早死したりしたら、この場合にはいかに巨額のもが無用に支出され、むだづかいされ無にされたらというべきであろうか。

かかる自由意志による資本の移転は貸手の側では次のような確信、あるいは信頼にもとづいている。すなわち、借手は移転に関してとりきめた義務にもとづいて将来の反対給付を精確におこなうであろうという確信、ないし信

頼である。かかる確信と信頼とは、貸手が貸付資本の所有権を失わぬようにすること、そして貸手が資本を手放している間の、すなわち貸手自身が資本を生産的労働または入用充足に使うことを放棄している間の、かかる待忍の代償としてとりきめられた反対給付が精確にはたされるところをさしているのである。

第一の関連においては、借手は資本を一定の期日に不変の状態で返済すべく義務づけられているか、あるいは返済義務は約定されておらず、一体資本を返済するかいなか、あるいはまたいつかえそうとするのかが借手の自由意志に委されている場合がある。最初の場合には貸手はふたたび彼の財産を完全に所有するようになる。そして彼は信用業務をなした以前の状態にもどるのである。もうひとつの場合には貸手はただ彼の差出した資本から借手が直接に財貨の形で実現する利益のうち契約によってとりきめた部分の取得を永続的に請求するという形でのみ自己の財産を保有することになる。貸手は自分の資本についての他のあらゆる種類の利用を放棄する。しかしそのかわり、これからの確定した利益の取得という利点をうる。なぜならば、あきらまにかかる信用業務は、ただ借手にたいする最大の信頼と、資本が生産的に投下される確実性がある場合にのみおこなわれうるからである。

後述するように資本返済に関するかかる差異こそは決定的な意味をもつ。この相違にこそ国家信用と私信用とを区分する点が存在するのである。

貸手をして信用業務を締結しようとする決意させる信頼は、同様に借手の債務を完済しようとする意志ならびにそのための手段を調達しうる能力に關係する。前の場合には借手の誠実さについての見解、後の場合には借手の財産状態および彼の業務の予想される生産性に関する見解が決定的な重要性をもつてあろう。勿論両者は互に助け

あい補いあうものではある。

1) ロッシャーは体系、第一巻、一四五ページで借手の財産の可処分性をも借手の能力に帰せしめたが、これは全く正当である。これにもとづいてたとえば商人は地主以上におおきな信用を享受することになる。

貸手の信頼に最大の影響を与えるものはひとつには国家秩序、とくに国家秩序のうちに達成しえた法的状態の完成の程度であり、またふたつには信用制度、自身がすでに入手した発展の程度である。両者は合して本質的に借手がその債務を完済するであろうという確信を貸手にたいして与える役割を果す。すなわち「まず」国家秩序は不誠実な借手には強制をもっておどすことによつてそうなる。「ついで」信用制度の発展は、債務者にたいして道徳的強制をなすことによつてもそうなるのである。すなわち、ひとたび非常な重要性をもつ信用制度が出現したあかつきには、借手がその債務を精確に完済することによつて信用を維持することは各自が最もつとめるべきこととなるからである。国家による起りうべき強制は私信用の支柱である。自己の信用が失はれることえのおそれ、貸手の信用を動揺させることえのおそれこそ国家信用のひとつの本質的要素なのである。この問題にわれわれはこれ以上たちらない。というのは、ここでは私信用はこれ以上論じないで国家信用をよりくわしく論ずるつもりだからである。

1) 信用立法の本質およびその歴史的発展についてのよりくわしい論述についてはロッシャー、体系、第一巻、九一節より九五節をみよ。

信用業務をはじめて遂行可能にした信用のもつかかる信頼要素の重要性は、知的、道徳的特性の生産性に関する最も明瞭なる証明のひとつである。状況の検討によつてかかる信頼を獲得することを彼に可能にさせた貸手の

國民經濟との関連よりみたる国債制度 (二)

知的特性なしでは、また貸手に信頼の念を起さすことを可能にした借手の道徳的特性、あるいは全社会の道義的精神なしでは、資本移転はおこなわれなかったであろうし、また資本移転からうまれる生産増大も生じなかったであろう。それゆえ生産増大の大部分はかかる非物質的諸力の生産物なのである。

同様にこの上述のケースについて国家の生産性と国家施設に使用された費用の生産性を例証しうるかもしれない。私的債権者たちの信頼を強化しうる積極的手段のうちでは確実にして迅速なる司法、よき債権立法、よき財産保護などがもっとも主要なものであるからである。しかしすべてのかかる媒体は国家が物的財貨を支出することによって産みだされるはずのものである。しかしながらこれについては適当な箇所よりくわしくしめそうとおもう。

信用制度の下でときおりおこる資本喪失の危険をもって、もし通例信用制度に反対する議論としようとするならば、これは全く支持しがたいものである。われわれはここで重ねて根拠なき仮定、すなわち、もし信用によって移転されないで、しかもかかる利益なき投資にひきよせられなかったならば、資本は国民経済のもとにとどまり利益をもたらしたかもしれないという根拠なき仮定に出会うであろう。資本は企業が非実際的であるとか、あるいは偶然失敗したためとか、さらには全く投資口がないことからつねに大量になくなってしまふであろう（これについては次章でよりくわしくしめすであろう）。とくにこの危険は大企業の場合、しかも企業があたりしく、またこれにたいするなんらの経験をもつみえなかったときにおこるであろう。これら企業は大体信用にもとづいて設立される。しかし、だからといって万一の失敗をもって信用制度によってそうなったのだと決してみなしはならないであろう。とにかく総体的には貸手はより高い保険料によって損害なしのままである。冒険的企業の場合

にはより高い保険料が資本利子の中にふくまれており、そして保険料は企業の生産費となる。かくて保険料は貸手ないし借手によって負担されるのではなく、生産物の消費者によって負担されるべきことになる。消費者は完全にその分だけ高い値段をつけた財貨を買うという形となるわけである。かくて国民経済全体にとっては信用制度の結果としての特別の損害を被ることはないであろう。すなわち、総体ケースの平均として考えねばならぬから、投資種類がおなじ程度の危険をもつために、あるいは投資口の全然の欠乏のために、すべての処分可能な資本が財産所有者によって使用される場合も、信用による資本移転の場合と同額の資本が減耗するであろう。

そもそもかかる全議論にたいしては次のように反論すべきであろう。すなわち、すべてのそれ自体全く好都合な制度も誤用または失策にさらされるし、しかもその好都合な制度がふだんは大きな作用をもつためにその影響がよければよいだけ、それだけこの制度の悪作用というものはおおきくなるであろう、と¹⁾。信用は勿論すでおおくのものを滅ぼした。しかし同時にそれ以上のおおくのものを救ったのである。信用制度を非としこれを追放しようとするのは、あたかも不注意な人間や未経験な子供がこれで指をやけどすることがあるかもしれないがゆえに火を地上から抹殺せよというのにひとしい。われわれはすでに信用制度のもつおおくの危険を認識し回避することを学び知った。そのほかの危険もまた害なきものにするのをわれわれは漸次可能となしうるであろう。

- 1) たとえば営業の自由を考えよ。これは全国民経済にとつていかに巨額の利益がある場合であっても、なおかつ最も必要なる生計の確実性を、協同的閉鎖性をもつツンフトと同じようにはすべての人々に提供しないであろう。

信用一般についての論述はこれでとめておこう。国家信用の本質を展開するために信用の第一原理の探求と確

定とが本書の目的から必要とされたのであった。本書の課題からはへだたっているので私信用については個々の点にまでたちいつて論ずることをしなかった。¹⁾信用はただその作用を資本にのみおよぼすということ、おおくの場合に信用は資本をはじめて誕生させ、それ以外の場合には資本により高い生命を与えるということをわれわれは発見した。かくていわば信用は資本とともに最高の事物を形成する。信用は資本との結合においてのみ活動しうるのである。信用と資本とはいわば動物界における精神と肉体との関係のようなものであらう。

1) 信用の流通手段増加への影響についてこれ以上顧慮しないのは、これが国家信用にとつてはたいした意味をもたないからにほかならない。われわれは国家信用を評価するにあたりこの点にもふれるであらう。どのみち信用のかかる作用は決して直接その本質からほとばしるものではない。むしろその作用は、われわれがあげた信用の三つの主要作用のうち第一の作用に属する。すなわち信用を介して全現存資本が全現存労働力に供給されるという作用なのである。信用は金属貨幣を紙にかえるわけであるから信用は元来金属貨幣での資本を解放し、もう一度使用するためにこれを処分可能にさせるのである。それゆえこれは拘束されていた資本を労働力に供給するのである。手形や銀行券などは信用によって創出された資本とみなすことはできない。現存する信用のしにすぎぬものである。公衆にその信用を支援してもらっているので、銀行というものは銀行券を発行し、これによって銀行は、支払いにあたり、銀行券を受取った人の資本を、銀行券で何かを買う他の人に移転させるからである。ここでは単なる資本移転がおこなわれるのみであるが、ただししかし第三者の仲介の下では第三者の保証の印として指図証券が発行されるのである。

かくて信用の本質をより明瞭にするためには、資本の本質と作用に関する若干の普遍的命題を探索し発展させねばならなくなる。しかしここでもまた資本の全領域にわたる研究をするのではなく、むしろ特殊目的を念頭においている。この目的とはさしあたり、個別経済の資本が私信用によって創出され発展させられたように、国家

信用によって創りだされ発展させられた総体経済の資本、すなわち国民資本の概念規定と考察とである。

第四章 資 本

国民経済に関する唯物的見解は資本の正しい概念規定をいままでもさまたげてきた。資本理論にとくに不利益な結果を生ぜしめた第二のわるい状態はつぎの点に存する。すなわち、たいいていの著作家たちは国民経済の觀察にあたって近代の複雑なる状態、とくに近代的營業から出發する。これによって国民経済が自然的發展におけるもつとも単純なる端緒より今日の高い段階に到達したこと、しかも国民経済が今日その内で動いている錯雜した諸形態は、これを萌芽的形態でもっている原始的な端緒にまでさかのぼることよつてのみ、はじめて理解できるということ、を看過しているのである。かかる誤まった方法にもついで生産源泉論は成立している。財貨がでさあがるためには營業業務についてはどんな条件が存在しなければならぬかを見まわし、これを財貨の源泉となづけた。またこれらが互に立っている下位の内的関連に充分注意をはらうことなしに、おおかれすくなかれこれらを独立の生産力とみなしたのである。資本が独立の生産物にかぞえられることはいうまでもない。

「そこで一部分一部分は掌中に握っているが、
お気の毒ながら、精神的脈絡が通じていない^{注①}」。

- 1) アダム・スミス自身は国民経済のかかる機械的見解への契機を与えることはなかった。彼の全著作を通じての基本的思考の旗印となっており、これを以て全巻を説きおこしているのはつぎのことである。すなわち「各国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品および便宜品のすべてを本来供給する元本である……」、と。スミスの国民経済との関連よりみたる国債制度(二)

S. 33

S. 34

国民経済との関連よりみたる国債制度 (二)

追隨者たちにはじめてはじめてかかる明瞭なる内的関連性が消失し、かわりに衡学的体系化を以て内的に相關するものの分離と並列とがおこなわれるようになった。セエは労働を非常に高く評価してはいる。にもかかわらず、彼が機械的見解を精密に論じようとしたために、かえってかかる誤まれる方向にとくに力をかすことになってしまったようにおもわれる。セエ、前掲書、第一巻、二三五ページで彼は一国民のすべての富が生ずる一般元本をつぎのように区分した。

産業能力（労働力）の元本と

産業の用具の元本

後者はさらに 所有の定っていない用具 および

所有の定っている用具 に分けられる。

さらに後者は 所有の定っている自然の用具と資本とに分けられる。

「これらすべての元本は生産的と名づけるに値いする」。ラウ、経済学、一〇九ページおよびロッシア、体系、第一巻、四四ページをも参照すべきである。

イギリス人の実際の気質はかかる方向には一般に無縁であった。しかしフランス人の著作家の場合には体系への願望、ドイツ人の著作家の場合には分類への衡学的衝動がつよくこの方向にかりたてたのである。

注(1) ゲーテのファウスト、第一部（一九三八行―三九行）よりの引用、メフィストフェレスと一学生との対話の中でメフィストフェレスが語っている句である（森鷗外訳による）。

アダム・スミスは資本学説の創始者と考えてよいであろう。彼は資本の科学的概念をはじめて確立したのである。¹⁾この場合スミスは彼の全学説の基礎になっている分業原理から出発した。そして労働者が彼等の特殊生産物（この生産物の価格からはじめて労働者はその入用充足手段の調達をなしうる）を完成するまでに必要な生計手段、なら

びに変形用の資材と用具とを供給するための充分のストックが集められたときにのみ、分業原理がかなり高度に遂行されうるということを発見したのである。かかる「財貨のストック」(Stock of goods)は労働者自身または他の人のもとに集められうるのであるが、これこそ眞の資本なのである。それゆえかかる定義は正しい考察方法の萌芽をもっている。ただスミスは分業の端緒からではなくその完成した状態から出発しているのでその表現は未熟ではある。「分業の普及のためには前もって集められた財貨のストックを必要とする」というかわりに、スミスはつぎのように言うべきであったであろう。分業の成立とその漸次的生成とともに分業のあらたな普及のためにつかひうる剰余、すなわち財貨のあらたなるストックが集積され不断に成立する、と。

1) スミス、国富論、独訳、第二巻、第一章、これについてはヘルマン、前掲書、四三ページ以下をも参照。

おなじくスミスは直接に消費することになつてゐるストックと資本とを区分しようとして、所得というものを期待しうるストックの部分、すなわち所得を期待しうる一人の総体的財貨ストックの部分を資本と名づけたのである。日常生活における資本という語の意味が彼を誤らせざるをえなかつたようにおもわれる。この後者の定義によつてスミスは後代の著作家たちのなした資本の誤りだけらの見解を誘発したのである。¹⁾

1) 資本概念の漸次的発展を跡づけることはここでこの任務たりえないであろう。いづれ本書の叙述がすむにつれて後代の著作家たちによる「資本」概念の多様な拡張について論評する機会があるとおもわれるからである。

これら多数の人々にとつては資本とはさらに生産するために貯蔵される物的資材、具相的財貨の一定数量と觀念されるのである。¹⁾この場合、これら具相的財貨が労働をたすけ、これら財貨の全価値あるいは一部の資本価値が新生産物に移行するのである。この場合には資本が労働をたすけるということ、²⁾資本が労働生産性を上昇させ

國民經濟との関連よりみたる国債制度(二)

るということ、そもそも資本は労働とならんで独立に生産に共働するものであるという觀念が支配的である。かかる見方こそおおくの誤りの源泉なのである。後にわれわれは以下のことを論断することにとめるであらう。すなわち、資本の独立的共働というものについては論じえないであらうということ、むしろ人間の經濟的意志がいつでも資本を生産に使うべきか否かをはじめ決定するであらうということ、それゆえに人間労働が資本をつかまえ、人間労働行為を資本に遂行するために資本を使用するや否やこの時はじめて資本は資本としての本性をあらわすであらうということ、を論断しようと努めるのである。生産過程において資本は終始積極的役割を果すのに反し、人間労働は積極的役割を果している。とくに物的生産の立場からしても労働の概念の内には労働をおこなう対象となっているひとつの物、ひとつの資材がふくまれているのである。労働はかかる資材なしでは考えられない。さて、かかる労働のイニシアティブによって生産のためにはじめて無から生まれたこの資材をいかして新財貨の独立的成立源泉とみなしうるであらうか。この資材をいかにして労働と同等の権利あるものとなしうるであらうか。

- 1) これはラウが彼の資本概念に到達した方法にもっとも明瞭にあらわれている。彼は經濟学、第一卷、第五〇節、五一節で國民財産の構成部分が二重の仕方に分けられることを発見した。すなわち、第一には土地と動的生産物、第二には享受手段と営利手段である。かかるふたつの分類を結合することによって(すなわち全く外觀的方法によって)彼はなかなかすぐ資本概念に到達したのである。「動的営利財のある同種のストックは資本と名づけられる」、と。資本の最良の概念規定は問題なくヘルマンが前掲書、五九ページでなしたものである。「資本、世襲地は交換価値をもつ利用の永続的基礎である」、と。最近ロッシアーが、体系、第一卷、六三ページで与えた「資本はさらに生産するため

に保有される生産物である」、という定義はあまりにも短く不確定であり、不充分というほかはない。ロシアの
労作にはすぐれたところがあるからして基本概念に充分の注意をはらわなかったことは誠に残念なことである。

2) 「もし労働が生産に貢献し、自然力との協働から利益をかちとるべきであるとするならば、そのためには資本の援助
が必須である」。ラウ、経済学、第一巻、一二二節「ラウの原著より直接邦訳した」。John Ramsay McCulloch,

Principles of Political Economy, London, 1825. 九六ページも参照のこと。

資本の資本たる特性は徹頭徹尾物質的なもの、すなわち事物自身の特性にあるのではない。これは経済活動をおこなう人間にもとづいているものであり、人間の意志によって産みだされたものである。すなわちこれは根本的には単なる抽象にほかならないのである。かくてある財が資本であるか否かを決定するものは財の性質にかかわるものではなく、またその財貨をして一定の結果をうむのに役立たすべき特性によるのではない。むしろ単に財が所有者の意志によって生産に役立つべき使命と用途をもっているか否かに依存するのである。¹⁾

1) J・S・ミル、原理、第一巻、六九ページでつぎのようにいう。「資本と資本でないものとの区分は商品の種類によるのではない。資本家の精神、すなわち他の目的ではなく、ある目的のために商品を使用しようとする意志のうちに存するのである」、と。

資本とは（土地からの解放と占有獲得による）財貨の最初の成立から最終的消費にいたるまでの変形過程の間に経過するすべての段階において存在する財貨の総体である。かくしてのみこれら財貨は永続的に財貨を完全にする労働活動の一基礎たりうるのであり、これによって財貨は不断に価値を増してゆくのである。消費にいたってはじめて財貨は資本ではなくなるのである。

S. 37

國民經濟との関連よりみたる國債制度(三)

かくて亜麻の種、肥料、農機具などは亜麻栽培業者の資本であり、粗亜麻は紡績業者の資本となり、亜麻糸は織物業者の資本となり、亜麻布は卸・小売業者の資本となる。そしてついにこれは亜麻の調度として家計の利用資本 *Nutzcapital* をなすのである。¹⁾

1) スミスも同様見解である。國富論、独訳、第二卷、第五章、一四六ページ以下参照。

もしこの農夫が一定の農地で亜麻のかわりに食料品とか、あるいは、穀類をすでに持っている場合には、直接消費される他の農業生産物の生産をなそうとする場合、たとえばビールのためのホップや麦を栽培しようとする場合、さらにはもし農夫が不注意から種を鳥にたべられてしまったり、輸送できないことによって肥料がつかわれない場合や畑をたがやすために所要の労働をはいえない場合、あるいは更には自然災害や人間の暴力によって栽培が破壊されるような場合、これらすべての場合には資本は問題とはならない。そもそも資本は存在しないのである。これら諸資本の最初のものである亜麻がうまれてこないからである。

亜麻栽培にたいするかかる諸障害や妨害や危険をとり除くために役立つすべてのものは、國民經濟の資本を増加させ國民經濟にたいしおおくの価値創造的労働のためのチャンスを与えるのに貢献するのである。これは第一の場合には直接享受の抑制、第二の場合には労働強化、第三の場合には財貨と労働の消費による保護であった。

資本学説の全貌を論ずるためには財、価値、労働その他の重要な基本概念の事前の確定が必要であり、またこれはあまりにも本書の目的からはなれすぎてもいるので、資本の全学説をここで展開する意図はもっていない。しかし資本の本質の確実なる認識を獲得し、かつ信用学説をこの上に確実にきざすためには資本の成立のあり方や資本の性質、資本の種類を若干詳細に論ずることだけは必要であろうとおもわれる。¹⁾

1) それゆえ他の著作家の当該個所のすべてを引用することによって引用体系を厳密に遵守することは本書のこの部分にたいしても断念しよう。

国民経済の目的、すなわち人間的入用と目的との充足は経済的労働活動によって達成される。経済的労働活動はつぎの事項からなりたっているものである。すなわち、国民経済的結合体の構成員がかかる充足を目標として意識し、ついでこの目標を達成しうる手段をさがしあてて、そして最後に土地に存在する資材をわがものにし、土壌の力を人間的入用がもっとも完全なる方法で充足されるような状況下において活動させ資材に作用させる、というような事項である。

かくして成立した財貨はそれぞれの国民経済の端緒においては非常に不完全たらざるをえない。ひとつの入用がおこると個々人は、彼が関与することなしに独立に存在している自然物をわがものにすることによって、これを充足しようとしなければならなかった。飢えれば動物を捕かくしたり、または野生の果実をとった。衣服が必要とあれば彼の力で倒せた動物のうちはじめの最もよいものから毛皮をとり、これを身にまとったのである¹⁾。しかし人間的目的に直接充当される自然物は数量的にすくなく年中いつもあるわけでもない。しかもつねに非常に不完全である。まさに自然力はそれ自身弱い助力を提供するにすぎないのである。

1) アダム・スミス、国富論、独訳、第二巻、一ページ。

かくて偶然または初歩的な思いつきから、やがてかかる自然物は加工によって入用によりよく応じえ、より完全に入用を充足させる形にすることができるといふことを知らざるをえなくなる。獲得したある自然の生産物の一層の加工の最初の原始的な試みとともに資本が成立したのである。直接消費することになっており、しかも従

国民経済との関連よりみたる国債制度(三)

来いつも入用がおきてはじめて(いわば日々に)直接獲得した用意——従来人々はかかるものの調達のみに限られていたのであるが——のほか、それについてまたはそれを媒介として完全化された労働をおこなうために人がより一層の財貨準備を必要とするに至るやただちに資本は生じたからである。

一、資本概念

かかる単純な資本概念は国民経済のすべての段階を通じて保持されている。一物一財を資本とすること、これを資本として貯蔵することはつぎのことを決定することにほかならないであろう。すなわち、これを人間的目的によりよく適合するものとするためにか、あるいは他の財貨の再加工のために、すなわち、そもそも人間的入用充足目的のために直接消費することをせず、人間的入用のより適した充足のために、協働さすべく、財貨をもう一度加工するよう決定することにはかならないのである。一言しておくべきことは、かかる財は財貨成立以前に再加工のためのものと定められていたということである。したがってこれは普通、直接に消費しえない一定の形態で存在するものである。¹⁾資本であるという特性はただ財貨の一過渡段階を意味するにすぎない。過渡段階においてこの財貨は、土地および占有獲得からの解放による特定財としての最初の成立の瞬間より人間的直接的な足までの全期間を通じて存在するものである。それゆえ完全なる形で変形される財は最も本源的かつ最も本質的資本部分を構成するのである。かかる財を転換資材(Verwandlungstoffe)と名づけよう。

- 1) 従来この点は大部分の人々が看過してきたところである。それゆえにすべての財貨はそれが資本となる為には、消費から貯蔵されなければならないと考える誤謬におちいった。これは最重要性をもつ一問題であるのでこれについては後に論ずることしよう。

資材を変形させるかかる労働活動が最初の原始的な端緒をひらくや、ただちにつきのことがあきらかにならねばならぬし、またその労働活動の漸次的発展によってつきることが益々つよく現われてこなければならない。すなわち、もし労働する人が直接にまず利用するよう指示される道具——自己のもつ筋肉内の自然力を利用しえた人間の手足——が補助手段にたすけられたならば、かかる労働はきわだっておおきな成果をもつかもしれない、ということである。その補助手段は独立に存在する自然物が自己に内在する自然法則的諸力を介して自由に提供したものである。かかる補助手段はひとつの効用をしめす。しかしこの効用はあらゆる財貨をもってする最初の肉体的入用の最も原始的なる充足形式の場合のようには直接には人体に移行しないか、あるいは直接にこれにふれないであろう。むしろそれら補助手段は財貨としてその目的を唯間接的に達成する。何となればこれら補助手段は他の直接消費される財貨が入用をより大量かつより完全な程度に充足するために協働する財貨としてその目的を達成したからである。補助手段の効用は直接消費される財貨に移行し、これら財貨と結合されて享受され消費されたのである。道具的補助手段、*die werkzeuglichen Hilfsmittel* の資本と補助資材、*die Hilfsstoffe* の資本とが発見されたのである。かかる財貨もまた勿論、このために有用だった場合には、これを獲得した直後に享受財としての直接的使用を禁ぜざるをえなかった。例えば肉をやくことになっていた木材、あるいは将来動物を倒すのに役立つかもしれない木の枝は、身体を暖めるという直接的目的の為に使ってはならなかったのである。単純なる解決策はここでは労働を増加させて木材の貯蔵をふやすことであつた。かくてわれわれはすぐに重要な命題につきあたると。すなわち、すべての資本は労働によつて成立する、と。

もしかなりひんばんにおなじ労働に役立ちえたであろうようなできるだけ永続性をもつ労働の補助手段をつく

りだすならば、人はやがて労働を節約することも、すなわち、おなじ労働時間でよりおおくのものを産みだすようにすることも発見せざるをえなかつたであろう。これはおなじくさしあたり労働強化をうながし、ついで労働強化に充分に報いるような利益というものを与えた。狩人は従来狩猟のために最初の最良の木の枝を利用していたが、いまや彼はとくに狩猟に適切なる木の枝をコン棒につくりかえる。従来彼は平地で火をおこしていたのに、いまや集めてきた石からカマドをつくる。従来木の幹をバラバラに集めて組みたてていた彼のヒュッテの代りに、いまやおおきな石を用いた巧妙なる建築物のための労をとるにいたる。もし石を遠くから運搬しなければならぬならば、これはあたらしい労力を用いることになるであろう。しかし住居がかなり永續性をもつ点でその効用は長期にわたって維持される。このようにして固定資本はますます発展する。

以前の不完全な状態のもとではこれら財貨の維持とひんばんな再生産のために必要だったかもしれない労働をいまや年々節約したであろうことを認めること、しかもこの節約された労働によって新入用の充足のための手段を産みだしうるのであることを認めること、このふたつは、人間をして彼の状態の不断の改善のための道が、彼の必要なる入用の充足手段のほかに、彼の労働によってあらたに生産された直接的生産物をできるだけ耐久的な形にする点に存する、という認識に到達させるようになる。なぜならこの方法では同時に存在する財貨の量が必然的に不断に増大せねばならないだろうし、またそれゆえに次の諸時期はおのづからすにより大なる量の利益、より大なる所得を所有しているだろうからである。かくて命題が発見された。すなわち、ただ固定資本の増大によつてのみ國民經濟は前進するのである、と。

はじめ人は自然的諸力を、極端に、不完全な方法で利用していた。精神的教育の生成と知識の増加につれて、自然

的諸力は、もしこれを合目的に統御し、また自然諸力と装置によって自然力が作用をおよぼしうべき事物とを適切に結合させられるならば、より大なる作用をうみだすであろうということを益々洞察するようになった。人々が車輪をうごかすために滝を利用することを学んだこと、火の強化のために「ふいご」を利用することを学んだことなどその一例である。これは今日われわれが機械としておどろかされているものへの原始的な端緒であった。

しかしかかる自然力のすべては事情によっては財貨にたいしおなじく破壊的な作用をもなすのである。かくて人々はやがて破壊から守るためにかかる適切な保護措置によってのみ巨大なる財貨量を獲得しうるであろうことを学んだ。このために必要な施設は資本としての財貨の新支出を要求する。その支出はただ事物の維持、すなわちこの支出なしには破壊されてしまったであろう事物の維持という形で有用であることがしめされたのである。鼠を垣でかこみ、家畜群のために家畜小屋をたて、家を気象の悪い影響からまもり、鼠を氾濫から守ったことなどがこれである。

生物、すなわち動物や人間によるおおきな被害にたいするかかる防禦施設の不充分性は新種の資本投下を産みだした。ここでは人は生産の保護のために、したがって生産助成のために人間労働力を利用したからである。家畜群には牧夫がつけられ、牧夫には衣食住などが供されねばならなかった。これは家畜群の所有者にたいし労働増加による穀物その他の財貨の剰余を生みだすことを必要とさせた。彼はその剰余を、ついで羊毛、肉や他の畜産経済の生産物の形で享受したのである。彼は穀物などのような新生産物をこれらの財貨に変化させたのである。人間労働力のトレーガーたる牧夫は家畜所有者にとつては彼の資本の過渡段階にすぎないであろう。かかる穀物の支出によってのみ彼はこの羊毛を入手しえたのである。

国民経済との関連よりみたる国債制度 (三)

かくて労働者のための生計手段の資本が形成された。生計手段の資本のみが人間増殖の自然力を非常に有効に活動させ、あるいはすくなくとも国民経済に効用あらしめるから、労働者の生計手段は最も重要な資本のひとつであり、しかもこれによって生産の主要因たる労働力も強化されるのである。

すべて多少とも専らあたらしい具相的財貨生産のみに役立つかかる多様な種類の資本と並んで、永続的使用によってこれから直接的効用のみを引出す種類の資本もまた徐々に発展した。これは利用資本 (Nutzeapital) あるいは使用資本 (Gebrauchskapital) と名づけられよう。最初の粗朴な形での住居や衣服はこの種の資本である。しかしながら生活必需品の充足と並んで快適さの充足とか美的感覚のようなかなり高度の感覚の充足につとめるようになったときに、はじめてこの種の資本のかなりおおきな増加がみられるであろう。さしあたり彼の貯木のうちからとくに適切な幹をえらび、ひとつの長板にし、それを従来もっているものよりもつねによりよい、またより快適な休息所をつくるために保管したものは、この種の資本の意識せざる発明者なのである。すべての資本形成にあたってひとつの重要な要素をなす享受の差控えは、ここではつぎに薪が入用とされる場合にこの長板を薪として利用してはいけないのであり、むしろ火のない不快さのままがまんしなければならぬか、あるいは他の木材を調達する労をとらなければならぬであろうという点に存するのである。

二、資本の成立

最も重要な資本種類の成立をあきらかにしようとしたし、しかもここではその個々の点にまではたち入れなかったかかる暫定的スケッチがすんだので、いまやわれわれは発展している国民経済下における、すなわち、分業と交換のおこなわれている経済の下での資本と資本の若干の主要特質とを考察することにしよう。ここでは労働

力の単なる所有だけでは、や人間的入用のための充足手段を調達するのに充分ではなくるのである。「私的」財産〔権〕の成立後は任意の自然生産物の獲得およびとくに土地に固着している自然力の無償の利用は、もはや一般にはおこなわれえないか、おこなわれたとしても非常に制限された程度でのみ可能だからである。かくて労働者は、彼のための生計手段をもつ人、換言すれば資本所有者のもとに就職することになる。労働者はその人にとって資本となるのである。労働力しかもっていない人々はそれゆえ決して経済活動をなしえない。すなわち、国民経済の構成員たりえないし、したがって国民 (Staatsbürger) ではない。逆に各人の経済的重要性は各人の資本所有がおおきくなるにしたがって大となる。彼はこれをもって独力で非常に多数の単なる労働者を、すなわち、任意に資本をその中に転化させうる労働者の多数を自由に使う。国民経済が発展すればする程それだけ資本への配慮が前面に現われて来なければならないという事態がここから生ずることになるであろう。

国民経済的資本は個人または総体の所有している全財貨のうちつぎのような部分からなる。すなわち、人間の入用と目的とを直接充足するために消費しえたり、また消費すべき形態ないしは状態にまだなっていないか、あるいはそもそもそうならない財貨の部分がこれである。したがってそれ自身もう一度直接享受財へ変化させる目的のために転形をうける運命にある財貨、あるいは他のかかる直接充足手段のために利用または使用される運命の財貨、あるいは第三に人間の入用の充足を直接うみだすことになっている永続的サービスをする運命をもつ財貨部分である。

資本が成立するのは、国民経済が一定時（経済時期、年）において消費するよりもより、おおく生産するからである。すなわち伝来的かつ必須と認められた入用のために必要とする充足手段のほかに、新財貨の生産のために増

国民経済との関連よりみたる国債制度 (二)

えた労働活動の対象たりえ、またたりうべき他の財貨をも国民経済が生産するからである。それゆえもし大部分の著作家達が節約によって、貯蓄によって、消費制限によって資本は成立するであろうというならば、かかる表現はたしかに間違つてはいない。しかし読者やきく人がすぐに正しい像をえかくほどには適切なものでもないであろう。何となればかかる財貨は一層の加工に使うためにのみ生産されたものだからである。個々人はたしかに交換を媒介としてこの財貨の価値を消費しうるのである。しかしもしこの財貨が物理的に破壊されていなければ、国民経済にとってはそれら財貨はまだ享受財にはなっていないのである。むしろ資本のままなのである。この財貨は交換の後には資本として他人の所有となる。しかるにその財の最初の所有者がその代りに入手し消費した財貨は、国民経済全体にとってはすでに享受財として存在していたものであるし、かつ資本となる使命を全然もっていないものである。

1) この見解はスミスに由来する。そしてこれは部分的には彼の著作の随所にあらわれている私経済的観点にたいする国民経済的観点の誤れる展開にもついているのである。「勤勉ではなく、節約こそが諸資本増加の直接的原因である。勤勉はいうまでもなく節約が蓄積すべき事物をつくりだす。しかし勤勉はつねに獲得しようとするであろうが、もし節約がこれを貯蔵せず、しかもつきつきに貯蓄してゆくことがなければ、そこからは決して資本というものは生まれぬであろう。これによって既存の資本は決して増大しないであろう」(スミス、国富論、独訳、第二卷、一一一ページ)。この論理の軽卒さは明瞭である。すくなくとも次のようにも言えたであろう。節約はつねに蓄積しようとしたであろうが、もし勤勉が何物をも得ることができなかつたならば、節約は何も貯蔵しえず、そして資本は成立しえなかつたであろう、と。しかしそもそも大体資本になるべき新財貨が直接に消費されるということは問題にならないのである。たとえばもし農夫がひとつの鋤を作るならば彼はいかにこれを消費するのであろうか。彼はこれを食

べることも着ることもできない。またこれをたのしみのために、たとえば馬車として利用もできないのである。——しかしながら節約のもとづいて非常にほめらるべき道徳的動機は、スミスおよびスミス後のおおくの人々を誤らせ、節約に非常におおきな意味を付与してしまつたのである。他の観点が経済問題の内にこのように入りこむことは断乎拒否されねばならない。人というものは世の中で最も殊勝なる意図をもつても、なお非常に誤っている歩みをすすめ、最も甚だしい不正をおかしているのである。

スミスの見解は若干の偏差はあつてもおおくの人々に保持されている。ラウ、経済学、一三三節。ヘルマン、前掲書、二八九ページ。しかしヘルマンは「關係^{註の}」をすでに節約された財貨と並んであげており、これはロッシア、体系、第一巻、七一ページにいたつてよりはつきりと次のように表現されている。すなわち、節約なしにも新資本は形成される。いわば文化的進歩によつて直接に形成されるのである、と。セエの見解は一層正しいものである。(セエ、前掲書、第一巻、三〇七ページ)、「本来資本はただひとつの方法によつてのみ形成される。すなわち、あたらしい生産物を再生産的な消費に使用する方法によつてである」。J・S・ミルは「資本は貯蓄の結果である」と言うことによつてこの「誤れる」表現を保持している。しかし後につぎのように付加することによつて事実上彼はわれわれの見解にはつきり近づいている。「資本の増加のためには消費の切りつめ以外のもうひとつの道がある。すなわち生産の増加である」(J・S・ミル、原理、第一巻、八五ページおよび八七ページ)、と。

注(1) なんらかの形で營業を容易にしたり、交換価値をもつなんらかの利益を約束するような他人との關係あるいは状態をもヘルマンは資本の列に加えているのである。顧客關係とか、營業權、各種の販売や購買を容易化する手段とか便宜がこれにふくまれると彼はいう。これらは各人が専ら自由に享受しうるものである。くわしくはヘルマンの前掲箇所をみられたい。

資本の本質に属するものとしはば主張されている財貨の貯蔵¹⁾は浪費からの貯蓄とおなじく資本の本来的概念

國民經濟との関連よりみたる囤積制度(二)

とは関係がすくない。資本を形成する財貨はむしろ、一層の生産が間断なくつづくように役立つべき使命をもつ。財貨貯蔵の必要性はむしろ分業と協業の錯綜した状態からのみ生ずるのである。かくて他の人によってさらに加工されることになっている財貨を、他の人がこの財貨を生産者との交換によって調達しうるようになるまで、生産者は彼の財貨を貯蔵しなければならない。あるいは生産者自身が一層の労働をおこなう場合には、彼がそのために必要な他の補助手段を他の人との交換によって手許に集めるまで、生産者は彼の財貨を貯蔵しなければならぬのである。

1) これはとくに本書原文三五ページ注2〔訳書、二〇〇ページ注1〕であげたロッシナー定義から出発している。しかしすべての学者も多少ともこれにもとづいている。かかる見解もまた資本の通俗の見解をもとにして成立したのである。

かくて貯蔵は資本本来の性格に抵抗することになる。貯蔵は外的環境の結果としてひとつの不可避的自然的障害とみなさねばならない。しかし貯蔵のあらゆる不必要なる拡大は非難すべきであり、資本の効用の一部をふたたび無効なものにする。すべての資本はもう一度の財貨生産に役立つというひとつの使命をもつがゆえに、現実

にこのために利用された場合にのみ資本は本来の資本たりうるからである。もしも当該財貨を最早変形しえないならばその財貨の直接的消費を抑制することは経済的損失というものである。もし労働がただ延期されたり中断されただけであれば、資本はその限りでは本来の資本ではない。何となればこれはいかなる効用をもつくりださないからである。かくてわれわれはこれを死せる資本、よりよくは休める資本となづける。この点において、

すべての資本をできる限り中断をすくなく永続的に生産に使用すること、資本を常時人間労働の作用下におくこと、という観点こそ最高の経済的観点たらざるをえない。ここに信用の非常なる重要性がはじまる。なぜならば

S. 46

信用はすべての資本をただちにもう一度の加工をなしうる人の手に移しうる唯一可能なる手段だからである。

三、資本の効用

資本が与える効用はかくて独立的に資本から生ずるものではなく、単に資本が存在することから必然的に生まれるものでもない。この効用はむしろ資本が労働活動の増大を可能にさせる点に存するのである。労働活動をまっしてはじめて資本の効用が成立するものである。それゆえ資本はむしろ労働活動の上昇、前進のはっきりしたメルクマールであり、しるしである。かゝる事実は従来からの大多数の著作家たちが考えているのとまさに逆の関係なのである。彼等はいふ、資本が共働作用するときのみ生産的労働はよりおおくのものを生産しうる、と。しかるに逆にもしそれを価値なき自然生産物から資本にしたのとおなじ労働が、継続する加工によってついに人間の入用の直接的充足手段をつくるべく続行されるならば、資本は生産のためのものとして存在するとみなされうるのであり、従ってかくしてのみ資本なのである。

それゆえ一財の完全なる生産までの全労働を一手に引受けている者にとっては、資本の性格はほとんどすべて消えうせてしまうのである。たとえばもし単独で農場を経営している農夫が亜麻布を生産しようとするならば、彼は畝に亜麻の種をまくことからはじめ、亜麻を成育させて収穫し、これを水につけ、こぎ、つむぎ、そして織る。その時には（紡ぎ車と織機を別にすれば）本来彼の紡績・紡織の資本については問題にならぬであろう。彼の亜麻布製造のための資本はただ農業のために最初に必要なものと道具にすぎない。他のすべてのものは労働である。彼が亜麻を植えそしてこれを以て資本を創出したことからの利益は、資本なしではおこりえなかつたであろうすべての次の価値創造的労働を彼におこなわせることを可能にさせる点に存する。この資本なくしては彼は時

S. 47

国民経済との関連よりみたる国債制度(二)

間を無為にすごすか、あるいは他の効用のすくない労働、すなわち、よりすくない価値しかうまない労働でもって時をすごさねばならなかったかもしれない。なぜならば亜麻布は彼にとつては最も希求に価ひした財貨にちがひなかったからである。だからこそ彼は他の財貨をえらばずに亜麻布生産をえらんだのであろう。もし彼にとつて他の財貨もまたおなじ価値をもっているならば、これら財貨の場合にも資本形成についての類似の道がはじまったかもしれないのである。

あたらしい価値をつくりだし、永続的剰余と富の増加とを可能にするものは、かくて労働力と労働力の行使なのである。なぜならば労働力の行使は勿論それが生産するよりもよりすこししか消費しないからである。さらに人間労働は天然資源に自然力を適用することにはかならないであろう。学問や技術がその究極目標を達成しないかぎり、人間はかかる適用の技能を不断に前進させる。しかしながら一方では人間はあたらしい力の発見により、あるいは経済への、あるいは経済の諸部門への新方式の導入によって生産を完全化させ、かつ上昇させる。その場合人はすでに以前の生産で達成している従来の入用充足のための消費だけにとめておく。前進しつつある経済にあつては消費がつねに生産の一段階だけ後にあることは当然の理であろう。何となれば今まきにはじめて財貨として認め、生産することを学び知ったばかりの財貨にたいしては、まだなんらの入用も存在しえないからである。

しかし無償の自然力をより巧妙に利用しての人間の経済的労働による、かかる生産の完全化は、労働材料、すなわち、資本としてあたらしい労働行為の基礎をなしている従来の財貨にのみおこりうるが故に、あたかも資本が独立にあたらしい価値を創造するかのような外観を呈するのである。

資本を最初につくり出した人、あるいは従来よりの資本の所有者が、もし一層の加工とかあるいは利用を自らなさないで、加工や利用目的のために資本を他の人に譲渡した場合、資本のかかる効用はより明瞭にあらわれるであろう。この時には他の人は自身の労働力を利用したりあるいは労働力が一層拡大するような可能性をその人が獲得するのである。資本のかかる移転なくしてはこれらのことは不可能なことであった。彼は生産された付加価値から以前の資本所有者にその一部を渡すことができる。なぜならば彼はつねに残りの一部を自ら保持しており、しかももし資本が彼の労働力の作用下になかったならば两部分ともに成立しなかったであろうからである。かくして利益はあきらかに相互的であり、しかも国民経済にとっては二重の利益となるであろう。ここにこそ信用が諸資本を最もよく分配するという信用の第二のおおきな作用が存するのである。すなわち、この作用によって信用は、資本を使用しえない人々にたいし、にもかかわらず資本からの利益を引出すことを可能にし、かつまた必要な資本をもっていない人々にたいし、その労働力をもっとも完全に利用する手段を与えるのである。資本の貸手は自己の資本を利用することを譲渡したことにはたいする報酬の請求根拠を次の二点にもとめている。すなわち第一に彼が自己の労働力をその対象に使用することを放棄したこと、第二に彼がその対象自体、あるいはその価値を直接的享受のためにただちに消費することを放棄したこと、これである。資本利子の根拠はここに存する。しかしながらここでは資本利子については、これ以上関与しようとはおもっていない。